インドネシアの大学生の対日認識について

── ディポネゴロ大学の調査報告 ──

今　中　比呂志

An Analysis of the UNDIP Student's Views concerning the Recent International Relations between Japan and Indonesia.

IMANAKA Hiroshi

目　次

はしがき
Ⅰ　調査対象 ── ディポネゴロ大学
Ⅱ　調査方法と項目
Ⅲ　インドネシアの大学生の社会生活意識
Ⅳ　インドネシアの大学生の対日認識
Ⅴ　インドネシアの大学生の対日平和意識
むすび

資料（調査項目）

はしがき

本調査報告は、インドネシア共和国のディポネゴロ大学法学部および社会政治学部において、1991年９月20日および2000年９月８日の二回にわたり私が行った学生の対日認識に関する意識調査を比較整理したものである。

周知のように、インドネシアの観光地バリ島のデンパサール空港までは、フライトで６－７時間の距離にあるが、歴史的には、戦前のアジア・太平洋戦争において日本が1942年から45年までの３年半にわたって軍事占領し、インドネシア国民を「ヘイホ」「ロームシャ」「従軍慰安婦」などの「人的資源」として使役して、多くの戦争被害を与えた経緯があり、また戦後の高度経済成長によって「経済大国」となった日本の著しい企業進出は日本とインドネシアとの間の政治的経済的関係をますます緊密化させつつある。このような状況下において、インドネシアの将来を担う大学生たちの対日認識を把

握しておくことは、インドネシア国民との平和的共存・共生を願望する日本人にとっては、意義ある作業であろうと考える。

本調査報告は、近年のスハルト政治体制の崩壊以後のインドネシアの政治的経済的混乱を視野に入れることができなかったが、この問題については、あらためて今後の調査研究の課題にしたいと考えている。

I　調査対象 ── ディポネゴロ大学

はじめに本報告が調査対象としたディポネゴロ大学の概要を紹介しておこう[①]。

ディポネゴロ大学（Diponegoro University : UNDIP）は、インドネシア共和国中部ジャワ州の人口100万人の都市スマラン市（Semarang）にあり、1957年に私立大学として設立されたあと、1961年の「政令第７号」に基づき国立に移管された大学である。大学は、現在では法学部・経済学部・工学部・医学部・農学部・文学部・社会政治学部・理学部・公衆衛生学部・水産海洋学部の10学部と付置研究所および大学院修士・博士課程を擁する国立総合大学である。学生数は約15,000人で、インドネシアでは５本の指に入る有力大学である。キャンパスは10年以上も前から、市郊外に統合移転中であるが、法学部・社会政治学部など文科系学部の移転は、国の財政事情から現在も遅延している。

学生の意識調査を実施した法学部（Fakultas Hukum）は1961年の創設であり、社会政治学部は法学部から分離独立して1968年に創設された。法学部および社会政治学部には、学部教育としてのサルジャナ（Ｓ１）課程、大学院修士課程としてのサルジャナ（Ｓ２）課程などがあり、４年課程の学部修了者には法学士（Sarjiana Hukum : SH）あるいは社会政治学士（Doctrandus : Drs）の称号が、また修士課程の修了者には修士（Magister : MA）の称号が与えられる。法学部には4学科（企業法・国際法・私法・公法）があり、約130人の教員スタッフが学部学生約250－300人の法学教育を担当している。社会政治学部には、社会学科と政治学科とがあり、約100人の教員スタッフが法学部とほぼ同数の学生の教育を担当している。正教授として、Warella 教授が「公共政策」、Sukardjan 教授が「インドネシア近代政治」、Sudarto 教授が「環境政策」、Hartoyo 教授が「社会学」を担当している。講義は、９月－１月と２月－７月の２セメスター制で行われ、午前７時から12時30分までの午前中、１コマ２時間半の授業である。

大学の創立の当初は、オランダの植民地支配が長期にわたったこともあって、オランダ法やオランダ語などの教育が中心であったが、現在では大学の講義内容（シラバス）をみても、アメリカや日本の科学技術や学問にたいする関心が強いといえよう。

インドネシアを代表すると思われる以上のようなディポネゴロ大学の学生の対日意識を調査することは、日本とインドネシア両国間の国際理解および交流の今後のあり方を

反省するための資料を提供する意義があるであろう。本報告では、とりあえず1991年と2000年の10年間に彼らの対日認識に変化がみられるのかどうか、また彼らの対日認識一般についての何らかの特徴を指摘することができるのかどうか、に主要な視点を置きながら、あわせて次世代を担う今日のインドネシア大学生の生活意識についても、以下の調査報告の課題としたい。

Ⅱ　調査方法と項目

1．調査方法

第一回目の1991年９月20日の意識調査は、私が「学術振興野村基金」の派遣助成によって、ディポネゴロ大学に出張した際に実施されたものである。「日本国憲法とその危機」と題して法学部で講義した際に、大学当局の了承をえてアンケート用紙を129名の聴講生に直接配布し回収した。その後も、私はディポネゴロ大学に出張する機会があったが、調査表は整理されずに、多忙にまぎれてそのまま書類棚のなかに放置されていた。それが今回の調査報告の機会に結び付いたといえようか。

今回、すなわち第二回目の意識調査は、金城学院大学人文社会科学研究所の共同研究プログラムへの応募というかたちで実現した。10年間という歳月を経て、インドネシアの大学生の対日認識はどのように変化したであろうか。私は、共同研究者の橋重孝氏とともに、インドネシアのガルーダ航空でジョクジャカルタに飛び、空港まで出迎えていただいたディポネゴロ大学法学部のスコチョ副学部長の案内でスマラン市に向かった。ディポネゴロ大学では、大学側の用意周到な対応によって、法学部と社会政治学部学生の第二回目の意識調査表を無事に回収することができた。第一回目の調査に比して調査対象数が二分の一の63名にとどまったのは、スマラン市の滞在日数が３泊４日と短かったことと、調査表の配布と回収を大学側に依頼せざるをえなかった事情による。しかし第一回目と第二回目の調査のおおよその比較はできたように思う。

2．調査項目

調査項目は、基本的には1991年度の広島大学法学部の当時の私のゼミナールの学生たちによって検討され、作成されたものである。それは、インドネシアの大学生の意識調査を実施するに当たり、同一の年齢層の大学生の時代感覚を尊重したいという主旨によるものであった。現時点でみれば、内容的に不十分な点が指摘されうるであろうし、また第二回目の調査でも、10年前の第一回目の調査項目をそのまま使用したことにたいする批判があるかも知れない。しかし同一の調査項目を使用し、両者を比較することによって、かえってインドネシアの大学生の対日認識の変化や特徴を明らかにすることが可能となるかも知れない。前者の批判にたいしては、調査項目の順序を整理し直すことによっ

て、インドネシアの大学生の意識をより体系的に示すことができるのかも知れない。今回の調査に当たって、調査項目自体に変更を加えなかったのは、以上の理由からである。

調査項目は、本調査報告の末尾に示したように、それぞれが若干の枝質問をもつ A, B, C, D の四つの部分からなるが、本調査報告では、(1)インドネシアの大学生の社会生活意識（B.「大学生の生活と今後に関する質問」)、(2)インドネシアの大学生の対日認識（C.「政治・経済に関する質問」)、A.「日本の経済援助に関する質問」)、(3)インドネシアの大学生の対日平和意識（D.「平和に関する質問」）の順序でまとめてみることにした。

調査対象のディポネゴロ大学の学生は、私の多少は踏み込んだ質問にたいして、率直に回答してくれた。とくに記述の回答を求めた調査項目では、多くの学生たちが日本人にとって貴重な意見を寄せてくれたことに感謝したい。それは日本とインドネシア両国の諸分野における今後の国際交流の発展にとって、きわめて参考となる有益な内容であるが、本稿で紹介しうるのは、そのごく一部分に過ぎないことを、あらかじめお断りしておきたいと思う。

Ⅲ　インドネシアの大学生の社会生活意識

1．大学進学の目的（「質問」B.1.）

表〈B-1〉でも明らかなように、大学進学の目的に関してもっとも多い項目は「自分の適性を見つけるため」(1-b)であり、第一回目の調査では51.6%、第二回目の調査では35.1%であった。二番目に多い項目は「都会に出たかった」(1-e) であり、第一回目の調査では14.9%であり、第二回目の調査では20.3%であった。三番目に多い項目は「好きな分野の勉強をするため」(1-c) であり、第一回目の調査では13.7%、第二回目の調査では14.9%であった。第四番目に多い項目は「しばらく自由な時を過ごすため」(1-a) であり、第一回目の調査では8.7%、第二回目の調査では8.1%であった。それ以外の項目は、「就職のため」にしても、また「親のすすめ」にしても、きわめて少なかった。「皆が行くから」は、ほとんどゼロ%であった。

大学進学の目的を積極的主体的に捉えていると考えられる「自分の適性を見つけるため」および「好きな分野の勉強をするため」を合計すると、第一回目の調査では65.3%、第二回目の調査では50%となり、ディポネゴロ大学の学生のほとんど半数以上にのぼる。少し古いデータであるが、1990年に広島大学学生委員会・厚生委員会が全学生を対象として実施した「学生生活実態調査」によれば、学生の入学の動機でもっとも多いのは「専攻したい学部・学科があったから」「自分の能力・適性に合致していると思ったから」で、合計すれば41.2%を占める[②]。このかぎりでは、インドネシアおよび日本の学生の

大学入学の動機は健全といえるのかも知れない。ただディポネゴロ大学では「都会に出たかった」(1-e) が多い点が目立つように思われるが、日本でも地方では「都会の大学へのあこがれ」志向が強いことを考えれば、それも程度問題といえるのかも知れない。

表〈B-1〉大学進学の目的について	1991年9月	2000年9月
a．自由な時を過ごしたい	14(8.7%)	6(8.1%)
b．自分の適性を見つけるため	83(51.6%)	26(35.1%)
c．好きな分野の勉強をするため	22(13.7%)	11(14.9%)
d．皆が行くから	0	1(1.3%)
e．都会に出たかったから	24(14.9%)	15(20.3%)
f．就職のため	4(2.5%)	4(5.4%)
g．親のすすめで	3(1.8%)	6(8.1%)
h．その他	4(2.5%)	5(6.8%)
i．無回答	7(4.3%)	0
計 (複数回答)	161(100%)	74(100%)

2．人生の目的（「質問」B.2.）

表〈B-2〉は、ディポネゴロ大学の学生が、どのような生き方に人生の価値を見い出しているかを問うたものである。もっとも多かったのは「自分らしい生き方」(2-c) であり、第一回目の調査では59.8%、第二回目の調査では40%を占めた。第二順位は、第一回目の調査では「物を買うよりも、良い経験にお金をかけること」(2-f) が13.6%であったが、第二回目の調査では7.1%に下がり第三順位となった。「生きがいとなる仕事をすること」(2-b) は、第一回目の調査では9.0%で第三順位であったが、第二回目の調査では24.3%で第二順位にあがった。「地位・名誉」(2-a) に人生の価値を見い出す回答は、第一回目および第二回目ともそれぞれ6.5%、12.9%であり、比較的少なかった。また「一生懸命働けば、必ず成功する」(2-g) は、第一回目は5.9%、第二回目は12.9%であった。「少し無理だと思われる位の目標に向かって頑張ること」(2-d)、「皆で力を合わせること」(2-h) および「将来より、毎日の生活を楽しく過ごすこと」(2-i) は、第一回目はいずれも0%、第二回目も ほとんど0%に近いか、あるいは0%であった。

表〈B-2〉人生の価値について	1991年９月	2000年９月
a．地位と名誉を得る	10(6.9%)	9(12.9%)
b．生きがいとなる仕事をする	14(9.0%)	17(24.3%)
c．自分らしい生き方をする	92(59.8%)	28(40.0%)
d．無理と思われる位の目標に努力する	0	1(1.4%)
e．毎日の生活より将来のため努力する	8(5.2%)	1(1.4%)
f．買い物より良い経験にお金をかける	21(13.6%)	5(7.1%)
g．一生懸命働けば必ず成功する	9(5.9%)	9(12.9%)
h．皆で力を合わせることが大切	0	0
i．将来より毎日の生活を楽しく過ごす	0	0
j．その他、無回答	0	0
計　(複数回答)	154(100%)	70(100%)

3．日常生活の充実感（「質問」B.3.）

表〈B-3〉は、ディポネゴロ大学生の学生生活上の充実感を問うたものである。「日常生活において、あなたが充実感を感じるのはどんな時ですか」という質問にたいして、1991年の意識調査では「趣味やスポーツに熱中している時」(3-b) が30.6%でもっとも多く、次いで「ゆったり休養している時」(3-c) が16.6%、「勉強している時」(3-a)は12.7%であった。2000年の意識調査では、「趣味やスポーツに熱中している時」は第一順位にあるものの15.3%と半減し、「勉強している時」は2%に落ち込んでいることが注目される。とくに2000年の調査では、「無回答」(3-g) が1991年当時の13.4%から50%に増加していることと合わせて考えれば、今日の学生たちは充実感を見い出す対象を見失い、むしろ迷いを生じているようにさえ思われる。その背景には、学生が落ち着いて勉学生活を送ることができる社会的環境を阻害する諸条件 ── 民族と宗教をめぐる紛争、就職難など ── の存在などが考えられるであろう。

表〈B-3〉日常生活の充実感について	1991年９月	2000年９月
a．勉強している時	20(12.7%)	3(2.0%)
b．趣味やスポーツに熱中している時	48(30.6%)	23(15.3%)
c．ゆったり休養している時	26(16.6%)	20(13.3%)
d．友人や知人との雑談	14(8.9%)	10(6.7%)
e．お金が入った時	14(8.9%)	15(10.0%)
f．その他	14(8.9%)	4(2.7%)
g．無回答	21(13.4%)	75(50.0%)
計　(複数回答)	157(100%)	150(100%)

4．学生の生活水準（「質問」B.4.）

表〈B-4〉は、ディポネゴロ大学の学生が世間一般から見て、どの程度の生活水準にあるのかを問うたものである。その結果は、1991年の意識調査では「中の中」（4-c）が57.9%で多数を占めていたが、2000年の意識調査では「中の中」は20.9%に減少し、「無回答」が1991年の5.7%から50%に増加した。このことは、学生の経済生活の安定性に、何らかの変化が生じつつある兆しなのかも知れないが、その原因を現時点で論及することはできないであろう。

表〈B-4〉生活水準について	1991年９月	2000年９月
a．上	0	1(0.7%)
b．中の上	18(12.9%)	11(8.2%)
c．中の中	81(57.9%)	28(20.9%)
d．中の下	12(8.6%)	14(10.5%)
e．分からない	11(7.9%)	13(9.7%)
f．無回答	8(5.7%)	67(50%)
計　（複数回答）	140(100%)	134(100%)

5．インドネシアの社会への不満ついて（「質問」B.5.）

表〈B-5〉は、インドネシアの現代社会にたいする学生の批判意識を調査したものである。1991年および2000年の意識調査とも「身分・家柄が重視されている」（5-a）がそれぞれ62.0%、57.1%と多く、それを否定する意見は1991年が33.3%、2000年は39.7%にとどまった。ここでの「身分・家柄」意識とは、もちろん前近代社会の封建的伝統的意識を意味するのではなく、1965年以降の長期にわたったスハルト開発独裁政権下で形成された新財閥や国軍・ゴルカルの新官僚体制を意味すると考えられよう。インドネシアの現代社会にたいする学生の批判的意識は、財・軍・官僚層の三位一体を象徴する新「身分・家柄」を意識したものとして首肯しえよう。

「組織の中の人間は、与えられた役割を機械的にしか果たしえな「」（5-b）という近代資本主義社会における人間機械論的発想に関しては、1991年には75.2%、2000年には73.0%という高い意識調査の結果であり、そうした発想を否定する学生は1991年が20.2%、2000年が23.8%であった。

「正しいことが通らない」（5-c）は、青年学生の正義感についての質問であるが、1991年は61.2%、2000年は47.6%が「はい」と回答して、インドネシアの国家・社会の歪みを意識した正義感の存在を示した。これにたいして「いいえ」と回答したのは、1991年が34.9%、2000年が38.1%であった。

「貧富の差があり過ぎる」(5-d) は、肯定的意見が多く、1991年は45.7%、2000年は47.6%であった。しかし「貧富の差」を意識しない否定的意見が、1991年には33.3%あり、2000年には30.2%であった。

「真面目な者が報われない」(5-e) は、肯定的意見と否定的意見とがほぼ同じであった。1991年には39.6%、2000年には46.0%が肯定的意見であり、これにたいして否定的意見は1991年には45.7%、2000年には41.3%であった。「真面目な者が報われない」という意識と、「正しいことが通らない」という青年学生の意識が40%を超える状況は、決して正常な社会とはいえないのかも知れない。

「若者の意見が反映されない」(5-f) は、1991年では69.0%、2000年でも75%の高率を占めた。インドネシアの国家・社会にたいする学生の不満や焦燥感の原点がここにあるように思われる。

「治安や風俗の乱れ」(5-g) を指摘する意見は、1991年には63.6%であったが、2000年には74.6%に上昇して、スハルト体制以後のインドネシア各地での紛争を意識している結果が現われているといえよう。私たちが、治安も比較的安定しているといわれるスマラン市を離れ、ジョクジャカルタ空港に向かう途中のマゲラン市では、2千から3千人にのぼると思われる開発民主党 (PPP) の自動車デモ隊に遭遇したし、バリ島北部のシンガラジャ市では、メガワティ派の民衆デモによって1998年に完全に焼払われた県政庁跡を見る機会があったから、「治安や風俗の乱れ」にたいする学生たちの危機感を窺うことができたように思う。

「老人や身体障害者などにた「する社会福祉が十分でない」(5-h) は、1991年が61.2%、2000年が69.8%であった。スマラン市郊外のベチャ労働者の家族のように老人や子どもがコンクリート壁のための石割りをして生活する貧困家庭、学校にも行けず新聞やアコーデオンを手に生活費をかせぐストリート・チルドレンたち、身体障害者などにたいする国の社会福祉対策は、あまりにも貧弱である。私が1990年9月に訪問したジョクジャカルタ市近郊の Ponggalan の「老人ホーム」(Panti Wredha) "Budi Dharma" には、68人の孤老や行き倒れ老人が収容されていたが、「社会福祉施設」とは名ばかりで生きていくだけの最低限の生活が保障されているだけであった。同じジョクジャカルタの郊外の Kaliurang の比較的恵まれた「愛老施設」(Sasana Tresno Werdha) "Abiroso" では、66歳の孤老が「見よ東海の空明けて」「兵隊さんよ有難う」などを口笛で歌ってくれたが、日本の戦争責任問題がここにも陰を落としている感を強くした[3]。

「環境破壊にたいして国民が無関心」(5-i) は、1991年の調査では79.1%、2000年の調査でも76.2%の高率を占めた。日本をはじめとする先進資本主義諸国の収奪型企業進出による環境破壊、インドネシア政府の「観光年」政策によって作り出された環境破壊

の実態にたいする学生の危機意識は、きわめて深刻である。観光地バリ島のデンパサールの朝夕のオートバイ・ラッシュによる大気汚染は周辺のグリーンを枯死させ、ホテルの新築ラッシュと出稼ぎ家族のスモール・ハウスの急増は緑豊かな水田を消滅させつつある。

インドネシアの国家と社会の以上のような危機的状況にたいする学生の反応は、次に見るように、全体としては楽観的であるように思われる。

表〈B-5〉	1. はい	2. いいえ	無回答	計
a. 身分家柄重視	80(62.0%) 36(57.1%)	43(33.3%) 25(39.7%)	6(4.7%) 2(3.2%)	129(100%) 63 (100%)
b. 機械的人間	97(75.2%) 46(73.0%)	26(20.2%) 15(23.8%)	6(4.6%) 2(3.2%)	129(100%) 63 (100%)
c. 正論が通らぬ	79(61.2%) 30(47.6%)	45(34.9%) 24(38.1%)	5(3.9%) 9(14.3%)	129(100%) 63 (100%)
d. 貧富の差	59(45.7%) 30(47.6%)	43(33.3%) 19(30.2%)	27(21.0%) 14(22.2%)	129(100%) 63 (100%)
e. 報われぬ社会	51(39.6%) 29(46.0%)	59(49.7%) 26(41.3%)	19(14.7%) 8(12.7%)	129(100%) 63 (100%)
f. 若者の意見	89(69.0%) 47(75.0%)	31(24.0%) 9(14.3%)	9(7.0%) 7(12.7%)	129(100%) 63 (100%)
g. 治安の乱れ	82(63.6%) 47(74.6%)	38(29.5%) 8(12.7%)	9(6.9%) 8(12.7%)	129(100%) 63 (100%)
h. 社会福祉	79(61.2%) 44(69.8%)	39(30.2%) 11(17.5%)	11(8.6%) 8(12.7%)	129(100%) 63 (100%)
i. 環境破壊	102(79.1%) 48(76.2%)	19(14.7%) 7(11.1%)	8(6.2%) 8(12.7%)	129(100%) 63 (100%)

＊各欄の上段は1991年度、下段は2000年度の調査を示す。

6. インドネシアの社会の将来像について（「質問」B.6.）

表〈B-6〉は、インドネシアにおける学生たちの今後の生活の見通しについて問うたものである。インドネシアの生活が、今後「良くなっていく」(6-a) と回答したのは、1991年の「安定」スハルト政権下では86.1%であったが、スハルト政権崩壊後の政情混乱期の2000年には60.3%と多少は減少しているものの、基本的に楽観的見通しをもっている点では変わらないといえよう。ただ「わからない」(6-d)層が、1991年の0%から

2000年の31.7%に増加していることは、近年のインドネシアの国家と社会の不安定を反映していると考えられよう。

表〈B-6〉	a．良くなる	b．変わらぬ	c．悪くなる	d．分からぬ	e．無回答	計
6．今後の生活の見通し	111(86.1%) 38(60.3%)	3(2.3%) 3(3.2%)	3(2.3%) 2(3.2%)	0 20(31.7%)	12(9.3%) 0	129(100%) 63（100%）

＊上段は1991年度、下段は2000年度の調査を示す。

Ⅳ　インドネシアの大学生の対日認識

1．政治・経済に関して（「質問」C.1.）

表〈C-1〉は、「日本はアジアのリーダーか」を問うたものである。この質問は、戦後の高度経済成長によって先進資本主義国入りを果たした日本のアジアにおける役割に関して、インドネシアの学生の対日認識を調査するために設定された。1991年の調査では、日本は「経済面でのリーダー」（1-c）と回答したものが79.8%でもっとも多く、2000年の調査でも57.1%で全体の半数を超えた。日本が「（政治面、経済面）いずれのリーダーでもない」（1ーd）は、1991年が4.7%、2000年が17.5%であったから、日本がアジアで何らかの役割を果たすことが期待されていると考えられよう。しかし日本が「政治面でのリーダー」（1-b）だと回答したのは1991年は0%、2000年も1.6%であり、このことは、アジアにおいて戦前日本が「政治的リーダー」として果たした「負の遺産」にたいする警戒心を示したものと考えられる④。そこでインドネシアでは、経済面に限定して、日本に「リーダー」としての役割が期待されていると考えられる。

表〈C-1〉日本はアジアのリーダーか	1991年９月	2000年９月
a．政治・経済のリーダーだと思う	15(11.6%)	11(17.5%)
b．政治面でのリーダーだと思う	0	1(1.6%)
c．経済面でのリーダーだと思う	103(79.8%)	36(57.1%)
d．いずれのリーダーでもない	6(4.7%)	11(17.5%)
e．無回答	5(3.8%)	4(6.3%)
計　実数(100%)	129(100%)	63(100%)

2．その他の関連質問

表〈関連C-1〉は、日本にたいする「あこがれ」意識を質問したものである。「あなたは日本をうらやましいと思ったことがありますか」という質問にたいして、1991年には81.4%、2000年には69.8%が「うらやましい」（1-a）と回答した。その理由は、記述に

よれば、日本の技術力と経済力がほとんどであった。

表〈関連C-1〉	a．羨望する	b．羨望しない	c．無回答	計
日本への評価	105(81.4%) 44(69.8%)	12(9.3%) 10(15.9%)	12(9.3%) 9(14.3%)	129(100%) 63 (100%)

＊上段は1991年度、下段は2000年度の調査を示す。

〈関連C-2〉は、「日本人でまず思いつく人名」を自由に記述させたものである。回答は、政治家から歌手、作家など広範囲にわたっているが、まず第一に、1991年と2000年のいずれの意識調査においても「ヒロヒト」「アキヒト」「ミチコ」など天皇一家の名を知っていることが印象的であった。政治家では、一般に中曽根康弘がもっとも良く知られており、また竹下、宮沢、橋本、小淵などの自民党の有力政治家の名が挙げられていた。歌手では五輪真弓、山下達郎、宇多田ヒカルなどであり、アクターではショウ・コスギ、金城武、オシン、マンガ家では鳥山明、スポーツ関係では中田英寿、沢松直子などの名が見られた。そのほか「ドラえもん」「スネ夫君」「のび太君」などの名が記述されていた。

〈関連C-3〉は、日本の首相の名を記述させたものである。1991年の意識調査では、全体のほとんど90%以上が当時日本の首相であった海部敏樹の名を記述したが、2000年の調査では、森喜朗の名を挙げた正しい記述はほとんどなかった。

表〈関連C-4〉は、「日本の首相にたいする印象」を問うたものであるが、1991年の意識調査では62.8%が「活躍している」(4-a) と回答し、次いで「印象なし」(4-c) が18.6%であったのにたいして、2000年の調査では「活躍している」が11.1%に下落し、「印象なし」は41.2%、無回答は39.7%であった。以上の結果からは、海部首相と森首相のインドネシアでの評価に大きな違いがあることが明らかである。

表〈関連C-4〉	a．活躍的	b．不活躍	c．印象なし	d．その他	e．無回答	計
首相の印象	81(62.8%) 7(11.1%)	7(5.4%) 4(6.4%)	24(18.6%) 26(41.2%)	2(1.6%) 1(1.6%)	15(11.6%) 25(39.7%)	129(100%) 63 (100%)

＊上段は1991年度、下段は2000年度の調査を示す。

〈関連C-5〉は、インドネシアへの日本の進出企業名を自由に記述させたものである。モーターバイクを通学に使用する学生が多いためであろうか、ホンダ、ヤマハ、スズキ、が多く、その他トヨタ、アストラ、ソニー、マツシタ、川崎、三菱、東芝、丸紅などの企業名が挙げられた。

表〈関連C-6〉は、「日本の経済発展に危機感をもったことがあるか」を質問して、日本の経済発展がインドネシアの経済社会にどのような影響を与えているかを、学生の意識を通して調査したものである。1991年の意識調査では、48.1%が「ある」、同じ48.1%が「ない」と回答したが、2000年の調査では、33.3%が「ある」、55.6%が「ない」と回答している。

表〈関連C-6〉	a．危機感あり	b．危機感なし	c．無回答	計
日本の経済発展	62(48.1%) 21(33.3%)	62(48.1%) 35(55.6%)	5(3.8%) 7(11.1%)	129(100%) 63 (100%)

＊上段は1991年度、下段は2000年度の調査を示す。

3．日本の経済援助について（「質問」A.）

表〈A〉は、「日本の経済力はインドネシアの経済に良い影響を与えていると思うか」(A-1) を問うたものである。偶々1991年9月には、海外からの経済援助に基づく地域開発のあり方が問われたスマラン市近郊のクドン・オンボ・ダム（Kedung Ombo Dam）建設問題が発生していた。ダム建設は農地約6000ヘクタールのダム転換を目的に、1986年から工事が開始され、3年後の1989年からの注水開始が予定されていた。このプロジェクトのための総経費2億8,310万ドルに対して日本輸銀は多額の融資を行い、また間組も45億2、900万円を受注して工事が開始されていた。しかし中部ジャワ州知事が立ち退き農民に示した保障基準は、土地の市場価格をはるかに下まわり、しかも実際には、その保障金額の約半額分しか農民に渡らないことに不満をもった約7000人のケムス郡の農民が立ち退きを拒否し、ダム建設工事は大幅に遅延していた。スハルト「開発独裁体制」下でのこうした状況に関連して、ディポネゴロ大学の学生が日本の経済援助のあり方をどのように見ているのかをたずねてみた。結果は、1991年が100%、2000年は88.9%が肯定的であり、日本の対インドネシア経済援助が直接的にクドン・オンボ・ダム問題と重なり合うことはなかった。それはインドネシアでは、経済援助の在り方を問題にするよりも、まず経済援助が必要だという意識が働いているのかも知れない[5]。「日本企業のインドネシア進出はインドネシアの社会経済にとって良いことと思うか」(A-2) については、1991年には89.2%、2000年には87.3%が肯定的であった。また「現在インドネシアにある企業に、あなたは好感をもっていますか」(A-3) と質問したところ、1991年には84.5%、2000年には80.9%が肯定的に回答した。次に「インドネシアに世界各国から送られる援助金の多くが日本からだということを知っているか」(A-4) について質問したところ、「知っている」は1991年が54.3%、2000年が36.5%であり、「知らない」は1991年が42.6%、2000年が60.3%であった。さらに「日本からの援助金の大部分を占

める有償貸付は無償貸付とすべきかどうか」(A-5) を質問したところ、「無償」は1991年が22.5%、2000年が12.7%であり、「このままで良い」は1991年が69.7%、2000年が82.5%であった[6]。日本からの「資金援助」(A-6) および「技術援助」(A-7) はインドネシアにとって必要か、の質問については、ほとんどが「必要である」と回答した。

表〈A〉	a．良い	b．良くない	c．どちらともいえない	無回答	計
1．日本経済の影響	129(100%) 56(88.9%)	0 6(9.5%)		0 1(1.6%)	129(100%) 63 (100%)
2．日本企業の進出	115(89.2%) 55(87.3%)	9(7.0%) 3(4.8%)	1(0.8%) 5(7.9%)	4(3.0%) 0	129(100%) 63 (100%)
3．日本企業への好感度	109(84.5%) 51(80.9%)	13(10.1%) 10(15.9%)		7(5.4%) 2(3.2%)	129(100%) 63 (100%)
4．日本の援助金について	70(54.3%) 23(36.5%)	55(42.6%) 38(60.3%)		4(3.1%) 2(3.2%)	129(100%) 63 (100%)
5．援助金は有償か無償か	29(22.5%) 8(12.7%)	90(69.7%) 52(82.5%)		12(9.3%) 3(4.8%)	129(100%) 63 (100%)

＊各欄の上段は1991年度、下段は2000年度の調査を示す。

V　インドネシアの大学生の対日平和意識

さきのアジア・太平洋戦争において、日本はインドネシアを1942年から45年までの3年半にわたって軍事占領した。その間、日本軍はインドネシア国民を動員して「人的資源」として戦争に協力させ、その結果、インドネシア国民の多くの生命を犠牲にした。インドネシアが1949年12月のハーグ円卓会議でオランダから国家主権を委譲され独立を達成後の50年間に、インドネシア青年学生の対日平和意識がどう変わったかを調査してみた。

表〈D〉	a．肯定的	b．否定的	c．どちらともいえぬ	d．分からない	無回答	計
1. 参戦の意志について	64(49.6%) 14(22.2%)	13(10.1%) 14(22.2%)	33(25.6%) 14(22.2%)	9(7.0%) 18(28.6%)	10(7.7%) 3(4.8%)	129(100%) 63 (100%)
2. 自衛隊は軍隊か	55(42.6%) 18(28.6%)	56(43.4%) 27(42.9%)	13(10.1%) 12(19.0%)		5(3.9%) 6(9.5%)	129(100%) 63 (100%)
3. 日本の防衛力増強	31(24.0%) 15(23.8%)	70(54.3%) 26(41.3%)	22(17.1%) 9(14.3%)	2(1.5%) 8(12.7%)	4(3.1%) 5(7.9%)	129(100%) 63 (100%)
4. 日本の平和への貢献	70(54.3%) 13(20.6%)	43(33.3%) 19(30.2%)	5(3.9%) 11(17.5%)	4(3.1%) 14(22.2%)	7(5.4%) 6(9.5%)	129(100%) 63 (100%)
5. 湾岸戦争と日本	82(63.6%) 4(6.3%)	35(27.1%) 17(27.0%)	9(7.0%) 22(35.0%)	0 12(19.0%)	3(2.3%) 8(12.7%)	129(100%) 63 (100%)
6. 自衛隊の海外派遣	83(64.4%) 42(66.7%)	39(30.2%) 11(17.5%)	3(2.3%) 6(9.5%)		4(3.1%) 4(6.3%)	129(100%) 63 (100%)

＊各欄の上段は1991年度、下段は2000年度の調査を示す。

1．学生の参戦意志について（「質問」D.）

表〈D-1〉は、「もしあなたの国が戦争になったら、あなたは参戦しますか」を問うたものである。「参戦する」（1ーa）は1991年は49.6%、2000年は22.2%であったが、「参戦するかも知れない」（1ーb）を合わせると、1991年は59.7%、2000年は44.4%であり、ほぼ半数が参戦の意志をもっているといえる。これにたいして、「どちらともいえない」（1-c）層は、1991年も2000年もほぼ同率であって、それぞれ25.6%と22.2%であった。「参戦しない」（1-d）意志を明確に示したのは、1991年が7.0%であったのが、2000年には28.6%に上昇した。

2．自衛隊の評価について（D-2）

表〈Dー2〉は、日本の自衛隊にたいするインドネシア大学生の印象を調査したものである。「日本の自衛隊は軍隊だと思いますか」という質問にたいして、「そう思う」（2-a）は1991年は42.6%、2000年は28.6%であり、「そう思わない」（2-b）は1991年が43.4%、2000年が42.9%であった。「自衛隊は軍隊ではない」という回答が意外にも多い意識調査の結果であった。また一方で、「日本の防衛力の増強は、さきの第二次大戦の時のように、アジアの平和を脅かす存在になると思いますか」（(D-3）という質問にたいしては、「そう思う」（3-a）が1991年は24.0%、2000年は23.8%であり、「そう思わない」（3-b）は1991年が54.3%、2000年が41.3%であった。以上の意識調査の結果は、

独立後50年を経た今日におけるインドネシア青年たちの対日平和意識にも、大きな変化ナが生じつつあることを示している。日本の自衛隊は、安保体制下におけるこれまでの防衛力整備計画によって増強され、今日のガイドラインにまでいたっており、その戦力がとくにアジア諸国から警戒されることが多いと思われるにもかかわらず、インドネシア大学生の間では、日本の防衛力増強にたいする危険意識は風化しつつあるといえるのだろうか。

「日本はアジアの平和に貢献していると思いますか」(D-4) という質問には、「そう思う」(4-a) が、1991年は54.3%、2000年は20.6%であった。「やや思う」(4-b) と合わせると、1991年が87.6%、2000年が50.8%になる。「そうは思わない」(4-c) は、1991年が3.9%、2000年が17.5%であるから、インドネシア大学生は、日本の平和への貢献をかなり評価しているといってよいであろう。その貢献の内容であるが、1991年4月に掃海艇をペルシャ湾に派遣した「さきの湾岸戦争の際の日本の態度をどう思いますか」(D-5) という質問にたいして、「評価する」(5-a) が1991年は63.6%であったのにたいして、2000年には6.3%に急落している。「やや評価する」(5-b) と合わせると、1991年は90.7%、2000年は50.8%となり、半数以上が評価していることになる。しかし「どちらともいえない」(5-c) が、1991年は7.0%であったのにたいして、2000年には35.0%、「評価しない」(5-d) は1991年は0%、2000年は19.0%と少なかった。

掃海艇のペルシャ湾派遣に続いて、1992年には自衛隊がPKO法にもとづいてカンボジアに派遣され、さらに1994年にはルワンダ、1996年にはゴラン高原、1999年には東チモールに派遣された。そこで「日本の自衛隊の海外派遣をどう思いますか」(D-6) と質問したところ、「認める」(6-a) が、1991年は64.4%、2000年が66.7%であり、過半数が自衛隊の海外派遣を認めている。一方、「認めない」(6-b) は、1991年は30.2%、2000年は17.5%であったから、「認める」にしても、多少の警戒心が示されたということであろうか。さらに最近の日本の政界におけるPKO五原則の再検討の動きや「日本の周辺有事」の際の「集団的自衛権行使」問題について、インドネシアの青年学生がどう反応するか興味深いが、この度は調査できなかった。

むすび

以上、ディポネゴロ大学の学生の対日認識に関キる意識調査を通じて明らかになったことを整理してみると、次のような特徴点が指摘されるであろう。

まず第一に、インドネシアの大学生の現状認識について。ディポネゴロ大学の学生たちは、インドネシア社会では階層的には中産層の生活レベルにあると考えているが、将来は社会の中軸を担うと思われるこれらの学生中間層は、インドネシア社会の貧困と福

祉問題に関心を寄せており、また「パンチャシラ」を国是としてインドネシア多民族国家の統一を保持してきたスハルト開発独裁体制の崩壊後も、各地域で噴出した民族・宗教紛争によって動揺するインドネシア社会と国家の現状と、外国資本とくに日本企業の経済進出やインドネシア政府の開発政策、観光年政策によってもたらされてきた環境問題に関心を寄せていることが明らかになった。

第二に、インドネシアの大学生の日本認識について。ディポネゴロ大学の学生は、出版文化やマスコミ文化などを通じて日本の社会と文化に良く通じていることが明らかになった。日本の大学生がインドネシアを認識している以上に、インドネシアの大学生は日本の社会と文化をより深く認識しているのではないだろうか。経済に関しては、日本の経済・技術援助がインドネシアにとって必要不可欠であることを認めており、日本企業のインドネシア進出に関しては肯定的である。この点は、少し古いデーターではあるが、韓国が日本の「経済侵略」に反発を示したことと対象的である⑦。しかし、いずれにせよインドネシアの大学生は、日本がアジアの経済面でのリーダーであることは認めるものの、政治的リーダーとしての日本の役割を認める意見はきわめて少ないことを、日本人は認識しておくべきであろう。政治に関しては、天皇一家や日本の政治家の名を良く知っており、とくに中曽根康弘、海部俊樹の名がもっとも著名であった。しかし森喜朗現首相の名を知っているものは、2000年９月の時点でわずか１名であった。

第三に、インドネシアの大学生の対日平和意識に関して。ディポネゴロ大学では、日本の自衛隊を軍隊として認識している学生は意外に少なかったし、逆に日本の防衛力増強や自衛隊の海外派遣を承認する意見が予想以上に多かった。これは自衛隊が世界の各地にPKO派遣されて、それなりの国際貢献を行っていることへの評価によるのかも知れないし、あるいは戦前の戦争被害意識の風化を物語るといえるのかも知れない。その意味では、たとえば日本の周辺有事に関する「新しい日米防衛協力のための指針」（ガイドライン）や憲法調査会の設置と日本国憲法改正論の動向、最近の集団的自衛権論争とフォーリー駐日米大使の「PKO五原則」発言⑧などをふまえたインドネシアの大学生の意識調査を、後日あらためて実施してみたいと考えている。

最近の10年間におけるインドネシアの大学生の社会生活意識、政治的経済的意識、そして対日認識の変化を調査して、多くを得ることができたように思う。以上のような意識調査を可能にしたのは、1990年以来のディポネゴロ大学との国際交流であり、とくに協力を惜しまれなかった法学部および社会政治学部の教員スタッフの方々に感謝したい。なお調査項目のインドネシア語訳については、アイルランガ大学のセノ講師の協力を得たことを記し、感謝したい。

（2000年11月1日）

註

① ディポネゴロ大学の『大学案内』としては、次を参照。Buku Pedoman : Universitas Diponegoro, Tahun 1990-1991 ; Buku Pedoman : Universitas Diponegoro, Tahun 2000-2001.

② 広島大学学生委員会・厚生委員会編『広大生はいま ── 第一回学生生活調査』、平成2年12月による。

③ "Budi Dharma" には9棟があり、当時は女性老人44人と男性老人24人の合計68人が収容されていた。それは国が支給するわずかな生活保護費によって運営される特別養護老人ホームであり、行き倒れによる孤老のみを強制収容する施設である。

"Abiroso" は10棟からなり、当時は男性18人、女性60人の合計78人が収容されており、19名の介護スタッフで運営されていた。週1回、ガジャマダ大学による医師の診療がある有料老人ホームである。

④ 1994年8月23日付『朝日』は、「日本人のアジア観」に関する世論調査を行っているが、その結果は、日本国民の71%が、戦後の日本はアジア諸国の発展に「協力してきた」と考えている一方で、53%の日本人がアジアの国々から「信ニ頼される国」になっていないとみている。また戦争被害を受けたアジアの諸国民にたいする戦後保障について、72%の日本人が「償いは不十分」だと考えていることが示されている。

⑤ クドン・オンボ・ダムの建設計画と日本の経済援助との関連については、差し当たり鷲見一夫『ODA援助の現実』(岩波新書、1990年) 93－108ページ参照。

⑥ 外務省経済協力局編『我が国の政府開発援助：ODA白書』下巻、(1999年) は、「我が国はインドネシアにとって最大の投資国である。我が国の対インドネシア投資額 (投資調整庁認可ペース) は、67年－97年8月末累計で389.82億ドルと全体の20.3%を占め、97年では54億ドルと外国投資額全体338億ドルの16.0%を占めている。」と述べている。(20ページ)

⑦ 1988年6月の朝日新聞社による「日韓共同世論調査」(『朝日』1988年6月16日付) を参照。

⑧ 駐日フォーリー米大使は、停戦合意の存在・紛争当事者による受け入れ同意・武器使用は自衛の場合に限るなどを定めた「PKO五原則が大きい制約となっている」と2000年10月16日に防衛大で講演した。(『朝日』2000年10月17日付)。

調　査　項　目

A. 日本の経済援助に関する質問

1. 日本の経済力はインドネシアの経済に良い影響を与えていると思いますか。
   a. はい　b. いいえ　c. 無回答
2. 日本企業のインドネシア進出は、インドネシアの社会経済とって良いことと思いますか、悪いことと思いますか。
   a. 良いことと思う　b. 悪いことと思う　c. 良くも悪くもない　d. 無回答
3. 現在インドネシアにある日本企業に、あなたは好感をもっていますか。
   a. 好感をもっている　b. 好感をもっていない　c. 無回答
4. インドネシアに世界各国から送られる援助金の多くが日本からだということを、あなたは知っていますか。
   a. 知っている　b. 知らない　c. 無回答
5. 日本からの援助金は、援助金とはいっても有償貸付がその金額の多くを占めています。これについて、あなたはどう思いますか。
   a. 無償貸付を増やすべきだ　b. このままで良い　c. 無回答
6. 日本からの資金面での援助は、インドネシアのために必要だと思いますか。
   あなたはどう考えますか。(記述)
7. 日本からの技術協力は、インドネシアのために必要だと思いますか。
   あなたはどう考えますか。(記述)

B. 大学生の生活と今後に関する質問

1. あなたが大学に進学した目的は何ですか。(複数回答)
   a. しばらく自由な時を過ごすため
   b. 自分の適性を見つけるため
   c. 好きな分野の勉強をするため
   d. 皆が行くから
   e. 都会に出たかったから
   f. 就職のため
   g. 親のすすめによって
   h. その他
   i. 無回答
2. あなたは次の項目のどれに価値があると思いますか。思い当たる項目のすべてに○印を付けてください。(複数回答)
   a. 地位と名誉を得ること
   b. 生きがいとなる仕事をすること
   c. 自分らしい行き方をすること
   d. 少し無理だと思われる位の目標に向かって頑張ること
   e. 毎日の生活を楽しむよりも、将来のために努力すること
   f. 物を買うよりも、良い経験にお金をかけること
   g. 一生懸命働けば、必ず成功する
   h. 皆で力を合わせることが大切
   i. 将来より、毎日の生活を楽しく過ごすこと
   j. その他

k. 無回答

3. 日常生活において、あなたが充実感を感じるのはどんな時ですか。（複数回答）
   a. 勉強している時
   b. 趣味やスポーツに熱中している時
   c. ゆったり休養している時
   d. 友人や知人と雑談している時
   e. お金が入った時
   f. その他
   g. 無回答

4. あなたの生活水準は、世間一般からみてどの程度だと思いますか。
   a. 上
   b. 中の上
   c. 中の中
   d. 中の下
   e. わからない
   f. 無回答

5. あなたの国の社会について不満に思っていることがあれば、○印を付けてください。（複数回答）
   a. すべてが身分によって決められ、家柄が重視され過ぎている
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   b. 組織の中の人間は、与えられた役割を機械的にしか果たしえない
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   c. 正しいことが通らない
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   d. 貧富の差があり過ぎる
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   e. 真面目な者が報われない
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   f. 若者の意見が反映されていない
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   g. 治安や風俗が乱れている
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   h. 老人や身体障害者などにたいする社会福祉が十分でない
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   i. 環境破壊にたいして、国民が無関心である
      ① はい　② いいえ　③ 無回答
   j. その他

6. あなたの国の社会、あるいはあなたの生活の見通しはどうですか。
   a. 良くなっていく
   b. 変わらない
   c. もっと悪くなっていく
   d. わからない

e. 無回答

C. 政治・経済に関する質問

1. あなたが本当だと思う項目を選択してください。
   a. 日本はアジアで政治・経済のリーダーだと思いますか
   b. 政治面でのリーダーだと思いますか
   c. 経済面でのリーダーだと思いますか
   d. いずれのリーダーでもない
   e. 無回答

その他の関連質問 _____

1. あなたは日本をうらやましいと思ったことがありますか。
   a. 思ったことがある（たとえば何に関してですか）
   b. 思ったことはない
   c. 無回答
2. 日本人でまず思いつく人名（歴史上の人物、現在の人物を問わず）を書いてください。
3. 日本の首相の名を知っていますか。その名を書いてください。
4. 日本の首相にたいして、あなたはどんな印象をもっていますか。
   a. かなり活躍している
   b. 活躍しているとは思わない
   c. 知ってはいるが、とくに印象はない
   d. その他
   e. 無回答
5. 日本企業でまず思いつく企業名（ブランド名でも可）を三つ挙げてください。
   a. ..... b. ..... c. ..... d. .....
6. 日本の経済発展に危機感をもったことはありますか。
   a. はい、あります　b. いいえ、ありません　c. 無回答

D. 平和に関する質問

1. もしあなたの国が戦争になったら、あなたは参戦しますか。
   a. 参戦します
   b. 参戦するかも知れない
   c. どちらともいえない
   d. 参戦しない
   e. 無回答
2. 日本の自衛隊は軍隊だと思いますか。
   a. そう思う　b. そうは思わない　c. わからない　d. 無回答
3. 日本の防衛力の増強は、さきの第二次大戦のときのように、アジアの平和を脅かす存在になると思いますか。
   a. 思う　b. 思わない　c. どちらともいえない　d. わからない
   e. 無回答
4. 日本はアジアの平和に貢献していると思いますか。

a. 思う　b. やや思う　c. そうは思わない　d. どちらともいえない
e. 無回答

5. さきの湾岸戦争の際の日本の態度をどう思いますか。
a. 評価する　b. やや評価する　c. どちらともいえない
d. 評価しない　e. 無回答

6. 日本の自衛隊の海外派遣をどう思いますか。
a. 認める　b. 認めない　c. わからない　d. 無回答

以　上

A. Pertanyaan tentang bantuan Jepang

1. Kekuatan ekonomi Jepang apakah ada pengaruh baik untuk negara Indonesia ?
   a. ya b. tidak.

2. Perusahaan2 Jepang yang masuk ke Indonesia, bagaimana pengaruhnya terhadap perkembangan social-ekonomi Indonesia ?
   a. Baik b. Tidak baik c. Tidak ada pengaruhnya.

3. Dengan adanya perusahaan Jepang di Indonesia, bagaimana menurut anda ?
   a. Senang b. Tidak senang.

4. Bantuan keuangan dari seluruh dunia untuk pembangunan Indonesia, terbanyak bantuan tersebut dari pemerintah Jepang, apakah dalam hal ini anda mengetahui atau tidak ?
   a. Tahu b. Tidak tahu.

5. Bantuan keuangan dari pemerintah Jepang tersebut, apakah anda berfikir／ mempunyai fikiran diterima pemerintah Indonesia 100% untuk pembangunan, apakah ada potongan untuk komisi ?
   a. 100% diterima penuh b. ada potongan untuk komisi.

6. Bantuan2 keuangan dari Pemerintah Jepang itu sebetulnya perlu atau tidak ?
   Bagaimana menurut anda ?

7. Bantuan tehnik dari pemerintah Jepang untuk pembangunan Indonesia, apakah perulu atau tidak ?
   Bagaimana menurut anda ?

B. Tentang kehidupan mahasiswa dan masa depan

1. Alasan apa, anda masuk universitas ?
   a. untuk merikmati hidup ?
      (ini hal yang nyata, bahwa kehidupan pemuda Jepang pada masa pendidikan di Perguruan Tinggi, betul2 untuk menikmati hidup).
   b. Untuk mencapai cita2 anda ?
   c. Karena sudah menjadi tujuan anda ?
      (suatu keharusan).
   d. Karena pengaruh teman2 anda ?
   e. Ingin menjadi pegawai negeri dengan harapan posisi yang baik. atau pegawai swasta dengan posisi yang baik ?
   f. Untuk kebanggaan ?
   g. Karena dorongan orang tua ?
   h. Iain2 .....

2. Pilihlah sesuai dengang pikiran anda, bagaimana yang paling berharga dalam kehidupan ?
   a. Jabatan yang baik.
   b. Pekerjaan apapun, asal cocok dan menyenangkan.
   c. Bekerja keras untuk mendapatkan kebahagian dimasa mendatang.
   d. Sekarang hidup enak, tetapi tidak memikirkan masa depan.
   e. Uang digunakan untuk mencari pengalaman, daripada dibelikan barang.
   f. Dengan bekerja keras, pasti sukses.
   g. Dalam kegembiraaan dan dalam kesusahan, tetap mengingat teman.
   h. Tidak memikirkan masa depan.
      (Hari ini, untuk hari ini).

3. Dalam kehidupan se-hari2, waktu kapan anda merasa kepuasan.
   a. Waktu belajar.
   b. Waktu melakukan hobby／sport.
   c. Waktu santai.
   d. Waktu ngobrol dengan temam.
   e. Waktu dapat uang.
   f. lain .....
      .....

4. Pada saat ini kehidupan anda sampai pada tingkat yang mana ?

a. Golongan tinggi (High class society).

b. Antara golongan menengah dan golongan tinggi.

c. Antara golongan menengah dan golongan bawah.

d. Golongan bawah.

e. Tidak tahu.

5. Apakah anda ada rasa tidak senang, bila didalam masyarakat terdapat (Didalam masyarakat Indonesia);

a. Adanya golongan priyayi.
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

b. Adanya tingkat klas sosial yang terlalu tajam.
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

c. Adanya group2 didalam kehidupan sehari2 didalam masyarakat.
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

d. Bila ada suatu pendapat walaupun benar, tetapi hal itu belum tentu suatu hal yang betul .
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

e. Justru orang yang serius dalam lingkungan, justru yang tidak disukai.
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

f. Suara dari generasi muda kurang didengarken.
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

g. Perasaan tidak aman.
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

h. Sedikit sekali perhatian pemerintah maupun swasta terhadap perawatan orangtua (jompo) dan penderita cacat.
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

i. Bila disuatu daerah terdapat pollusi (pencemaran lingkundan).
1. ya 2. tidak, alasan .....
.....

6. Bagaimana menurut anda tentang masa depan negara Indonesia ?
   a. Pasti judi lebih baik.
   b. Tidak berubah.
   c. Judi lebih jelek.
   d. Tidak tahu.

C. Tentang Politik dan Ekonomi

1. Pilihlah jawaban dibwah ini yang anda anggap benar !
   a. Apakah pada saat ini Jepang merupakan pemimpin politik dan ekonomi di Asia ?
   b. Politik saja ?
   c. Ekonomi saja ?
   d. Bukan dua2nya.

Lain-lain :

1. Apakah anda pernah memimpikan negara anda akan seperti negara Jepang ?
   a. Ya, misalnya tentang apa.....
   .....
   b. Tidak.
2. Tuliskan nama orang Jepang yang anda ketahui (misalnya, aktris, ekonom, politician, dll.)
3. Apakah anda tahu nama perdana menteri Jepan ?
   Bila tahu, sebutkan namanya.....
4. Bagaimana pendapat anda tentang perdana menteri Jepang tersebut ?
   a. Perhatiannya besar terhadap perkembangan dunia.
   b. Perhatian kurang.
   c. tatu, tetapi tidak begitu perhatian.
   d. Pendapat lain, alasan.....
   .....

5. Apakah anda tahu nama2 perusahaan Jepang, bila tahu coba sebutkan.

a. . . . . b. . . . . .

c. . . . . d. . . . . .

6. Apakah anda pernah merasa kuwatir dengan perkembangan／ kemajuan ekonomi Jepang ?

a. ya b. tidak.

D. Tentang perdamaian

1. Bila terjadi perang.

a. Apakah anda mau jadi tentara.

b. Tidak tahu jadi apa.

c. Kemungkinan tidak jadi tentara.

d. tidak tahu jadi apa.

2. Di Jepang ada nama Pasukan Bela Negara, tugasnya hanya menjaga dan mempertahankan negara, apakah anda berpikir sama dengan tugas tentara di Indonesia ?

a. ya b. Tidak berpikir begitu c. Tidak tahu.

3. Pasukan Pertahanan／ bela dari Jepang sekarang bertambah kuat, apakah hal tersebut berbahaya untuk perdamaian,seperti halnya pada perang dunia Ⅱ.

a. ya b. tidak c. kurang tahu d. tidak tyahu

4. Pemerintah Jepang berusaha mengadakan perdamaian di kawasan Asia, bagaimana menurut anda ?

a. ya b. sedikit saja c. tidak berpikir begitu d. kurang tahu.

5. Waktu perang teluk terjadi, tentang sikap pemerintah Jepang terhadap perang teluk, bagaimana pendapat anda ?

a. Berguna b. kurang berguna c. kurang tahu

6. Apakah anda setuju, bila tentara bela dari Jepang kekusar dari Jepang untuk membantu perdamaian (misalnya sekarang membantu membersihkan ranjau di teluk Persia) ?

a. ya, setuju b. tidak setuju c. tidak tahu.

Kami ucapkan terima kasih, atas partisipasi anda dalam pengisian angket ini.

Sept. 1991.

Hormat saya.

Imanaka Hiroshi.